

## トマス・アキナス『「主の祈り」講解』 —翻訳のこころみ①—

Thomas Aquinas' 'In Orationem Dominicam' — Trial Translation I —

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

## 要 旨

トマス・アキナスの祈り概念は、研究すべき点を多く残している主題である。主の祈りは、イエスが教えた祈りと位置づけられている祈りであり、トマスは『神学綱要』Compendium Theologiae 第2部の希望論を、主の祈りの註釈として展開しようとした。『神学綱要』Compendium Theologiaeの希望論は残念なことに第10章の途中で途絶しているが、『神学綱要』の現代語訳のある版では、この『「主の祈り」講解』と複合して、ありうべき議論全体の示唆を得るという形態をとっている。

本試訳は、紙幅の都合により、『「主の祈り」講解』の最初の3分の1を訳出する。内容は、祈りとは何か、「天におられる私たちの父よ」という呼びかけの講解、「御名が聖とされますように」という第1の願いの講解である。

底本としては、In Oratio Dominicam videlicet "Pater Noster,, Expositio, in: S. Thomae Aquinatis Doctoris Angeli Opuscula Theologica, vol.II., De Re Spirituali, cura et studio P. Fr. Raymundi M. Spiazzi O. P., Marietti, 1954, pp.221-225を用いた。マリエッティ版の神学小品集第2巻は、収録する全著作の節に通し番号を振っており、翻訳中の節番号は1019番から1050番である。

なお、文中に多数存在する聖書からの引用に関し、書名の和訳は新共同訳に拠ったが、『詩編』の編番号は文中ではヴルガタ訳の番号で示されているので、〔 〕内に新共同訳での編番号を記載した。

なお、この翻訳は筆者の知るかぎり本邦初訳である。

**Key Words** : トマス・アキナス, 祈り, 主の祈り

## 主の祈り, すなわち「私たちの父よ」講解

**1019** 他の祈りよりも、主の祈りがより主要的なものだと思われる。

A) すなわち、〔主の祈りは〕祈りの内に必要とされる5つのものを有している。すなわち、祈りは、平和でなければならず、正しくなければならず、順序正しくなければならず、奉げられたものでなければならず、謙遜でなければならぬからである。

**1020** a) まず、〔祈りが〕平和であるのは、信頼をもって、その恵みの王座に我々が向かうためであり、このことは『ヘブライ人への手紙』4章で言われている。また、信仰のうちには欠け

るものがない。すなわち、『ヤコブの手紙』1章6節でこう言われている。「また、信仰のうちでは、何もかも加わるよう欲しないだろう」。また、この祈り〔主の祈り〕が最も平和であるのは、理に適っている。なぜなら、我らの弁護者によって形作られているからである。彼は最も知恵ある願い訴える者であり、そのうちには、すべての知恵の宝庫がある。このことは、『コロサイの教会への手紙』2章で語られており、それについて、『ヨハネの手紙』1章でこう言われている。「我々には父の許での弁護者として、義なるイエス・キリストがいらっしゃる」。それゆえ、キプリアヌスは『主の祈りについて』でこう言っているのだ。「我々にはキリストが、弁護者として父の許に、我々の罪の〔とりなしの〕ためにいらっしゃるのだから、我々の過ちのための時は、我々の弁護者たちが、言葉を表明する」。さらに、〔主の祈りが他の祈りより〕より平和であるのは明らかである。というのは、彼〔キリスト〕ご自身が、祈りを神と共に聞き届ける方でありながら、我々に祈ることを教えたのであるから。『詩編』90〔91〕編15節にあるように。「彼は私に向かって叫ぶだろう。そして、私は〔私こそが〕彼〔の叫び〕を聞き届けるだろう」。それゆえ、キプリアヌスはこう言っている。「友なる、家族なる、そして奉げられたものである祈り、主ご自身への懇願」。それゆえ、この祈りからは、決して実りなしに退くことはない。すなわち、アウグスティヌスの言うところでは、それ〔主の祈り〕によって、赦されること〔小罪〕については放免される。

**1021** b) また、我々の祈りは正しくあらねばならない。祈る時、自らに相応のものを神に願うためである。すなわち、ダマスケヌスは言っている。「祈りとは、相応しいものを願うことである」。〔ダマスケヌスがわざわざこういった理由は〕なぜなら、相応しくないものを欲するものであるために、祈りが聞き入れられない、ということは多いからである。『ヤコブの手紙』4章3節「願って受けないのは、悪しきことを願っているからです」。ところで、何を願うべきかを知るのは、極めて難しい。何を欲すべきかを知ることが極めて難しいからである。〔なぜこう言えるのか〕というのは、祈りで正当に願われていることは、正当に欲せられているからである。そして、それゆえ、使徒はこう言っている。『ローマの教会への手紙』4章26節。「すなわち、我々は、何を祈れば然るべきことなのか、知らない」。ところで、キリストご自身が博士である。すなわち、我々が何を祈らねばならないか教えることは、まさに彼の仕事である。すなわち、弟子たちは彼〔キリスト〕にこう言った。『ルカによる福音』9章1節。「主よ、私たちに祈ることを教えてください」。それゆえ、あの方が祈るよう教えてくださいと求めることは、最も正しい。それゆえ、アウグスティヌスはこう言っている。「ところで、私たちが語るべき言葉として語ることはすべて、その主の祈りにあるものに他ならない、正しく、相応しく私たちが祈っているなら」。

**1022** c) また、祈りは、欲望と同じく、順序正しくあらねばならない。祈りは欲望の解説 *interpres* だからである。また、すなわち、霊的なものを肉体的なものより、天上的なものを地上的なものより、欲することと祈ることにおいて我々が優先する時、ここに然るべき順序はある。『マタイによる福音』4章33節でこう言われているように。「第一のものとしては神の国とその義を求めよ。そうすればこれらすべてがあなたにたに加えられるだろう。このことをこそ主は、この

祈りの際守るよう教えられた。すなわち、これ〔この祈り〕では、まず、天上のものが乞い求められ、その後で地上のものが求められているのである

**1023** d) また、祈りは奉げられたものでなければならない。奉献による脂の乗った食事によって、祈りのいけにえは神に受け入れられたものとなる。『詩編』62〔63〕章5節から6節でこう言われているように。「あなたの名において、私の手を上げよう。脂肪と脂たっぷりの食事によるかのように、私の靈魂が満ちるように」。しかしながら、奉献は、たいていは、祈りの冗長さのために弱められる。それゆえ、主は、祈りの過剰な冗長さを避けるよう教えられた。『マタイによる福音』6章第7節にあるように、こうおっしゃっている。「しかし、祈る者は多く語ろうとするな」。そして、アウグスティヌスは『プロバへの手紙』でこう言っている。「祈りでは、多く話すことのないように。多く訴えることの欠けないように。熱心な意図〔熱意が〕がそうさせ続けるなら〔限り〕」。それゆえ、主はこの短い祈りを定められた。

**1024** 奉献は、愛徳から、それ〔愛徳〕と共に起こる。これ〔愛徳〕は神と隣人とへの愛であり、これらはいずれも、この祈りで表されている。すなわち、神的な愛を〔祈りに〕行きわたらせるために、我々は彼を父と呼ぶのであり、隣人への愛を〔祈りに〕行きわたらせるために、我々はすべての人のために祈ってこう言う。「私たちの父よ、私たちから、私たちに属するのが正当なものを去らせることさえしてください」。こうなるように、隣人たちへの愛が私たちを巻き込んでいる。

**1025** また、祈りは謙遜でなければならない。『詩編』101〔102〕編18節でこう言われているように。「〔神は〕謙遜な者の祈りを顧みられた」。また『ルカによる福音』18章でパリサイ派の人と徴税人に〔向かって言われたように〕。また『ユディト記』9章16節でこう言われているように。「謙遜な者たちと、温和な者たちとの願いが、常にあなたにとって喜びとなった」。このような謙遜が、この祈りで守られているのである。すなわち、真の謙遜があるのは、自分の力には何も見込まず、すべて神の力によって達成されるだろうと期待する時である。

## II

B) 加えて、祈りは3つの善をなすことに注目せよ。

a) すなわち、第1には、悪に対する効果的で有用な薬である。すなわち、やってしまった罪から解放する。『詩編』31〔32〕編5—6節、「あなたは、私の罪という不敬虔を見逃す。このことのために、すべての聖人はあなたに祈るだろう」。だから強盗は十字架上で祈り、赦免を得たのである。「今日、あなたは私と共に楽園にいる」(『ルカによる福音』23章43節)。だから、徴税人は祈り、義とされて彼の家に下りたのである(『ルカによる福音』13章)。

また〔祈りは〕、さらに加わってくる罪への恐れ、すなわち苦しみと悲しみから解放する。「あなたたちのうちの誰が悲しむのか。等しき靈魂で祈るべきものだ」(『ヤコブの手紙』末尾)。

また、迫害と敵とから解放する。「彼らが私を愛するよう、私から引き離し、また私こそが祈ったのだ」(『詩編』108〔109〕編4節)。

1026 b) 第2には、〔祈りは〕すべての望みを得るのに効果がある。「あなたたちが祈る者として願っているものすべてを信じよ。受け取ることになるからである」(『マルコによる福音』9章24節)。そして、我々〔の望み〕が聞き届けられないなら、それは、いつも絶えず願っているというのでないからだ。「(すなわち)常に祈り、欠かしてはならない」(『ルカによる福音』18章1節)。あるいは、我々はむしろ救いに役立つものを願っていないからである。アウグスティヌスによれば、「神はしばしば、我々が欲するものを、我々が好むものを分かち与える形では、分かち与えない」。そして、このことは、パウロに認められる。彼〔パウロ〕は、3度自分から責め苦が除かれるようお願い、聞き届けられなかった(『コリントの信徒への手紙 二』12章8節)。

1027 c) 第3に〔祈りは〕それは我々を神に親しくするがゆえに有用である。「私の祈りが、燃えるもののように、あなたの視野に入るよう方向づけられていますように」。

### ゆえに、こう言うのだ。「父よ」

1028 ここでは2つのことに注目せよ。すなわち、どのような意味の父なのか。そして、私たちは彼〔父〕に、父なのだから何をしなければならないのか。

さて、父と言われているのは、種的創造の意味においてである。〔彼は〕私たちを、その像と似像とにかたどって創造し、それ〔像または似像〕を他のより下位の被造物には刻印しなかったのであるから。「あなたの父こそが、あなたを創り出した」(『申命記』32章6節)。

同じく、統治の意味でも〔言われている〕。なぜなら、〔父は〕すべてのものを治めるが、そのあらゆる場合に、私たちを主とし、他のものを僕として治める。「父よ、あなたの摂理は(すべてを)治める」(『知恵の書』14章3節)。「大いに心を配って、あなたは私たちを配置される」。

同じく、養子縁組の意味でも〔言われている〕。(父は)他の被造物に、贈り物として(何かを)与えてきたが、私たちには遺産として〔与えてきた〕。そしてこれは、〔私たちが〕子どもだからだが、しかしまたこれは、子どもであるとともに相続人でもあるならばの話でもある。使徒〔は言う〕。「あなたたちは、恐れのうち、僕として仕えるという霊を受けたのではなく、子として養子縁組するという霊を受けた。その〔霊の〕うちで私たちはアッバ、父よと叫ぶ」(『ローマの信徒への手紙』8章15節)。

1029 我々は彼〔父〕に4つのことをしなければならない。

第一には、名誉を〔帰さなければならない〕。「私が父であるなら、私の名誉はどこにあるのか」(『マラキ書』1章6節)。それは3つのことによって成る。〔すなわち〕神に向かって賛美を与える際に、「賛美のいけにえが私に名誉を帰するだろう」(『詩編』49〔50〕編23節)。これ〔賛美〕は、口だけではなく、心にもあらねばならない。「この民は唇を以て私に名誉を帰する。しかし、彼らの心は私から遠く離れている」。〔また、神に名誉を帰することは〕神に向かい体を清める際に〔成る〕。「あなたたちの体によって神に栄光を帰し、神に向かい歩みなさい」。〔また、神に名誉を帰することは〕隣人に対し判断が公平である時に〔成る〕。「王の名誉は判断を愛する」(『詩編』98〔99〕編4節)。

**1030** 第二には、私たちは彼〔父〕を、父であるがゆえに、真似なければならない。「あなたは私を父と呼び、私が歩む後をぐずぐずせずについてくるだろう」（『エレミヤ記』3章19節）。これ〔模倣〕は3つの形で完成する。〔すなわち〕愛という形で。「あなた方は神の模倣であれ。最も愛しい子どもたちのように。そして、愛のうちに歩め」（『エフェソの信徒への手紙』5章1節）。そして、これは心の中で起こるべきである。〔また〕憐れみの形で。愛は必ず憐れみと共にあるからである。「あなた方は、憐れみ深くあれ」（『ルカによる福音』6章36節）。そして、これは業のうちに起こるべきである。〔また〕完成の形で。愛と憐れみとは、完成されていなければならないからである。「あなた方は完成されてあれ。あなた方の天の父もまた完成されてあるように」（『マタイによる福音』5章48節）。

**1031** 第三には、私たちは彼〔神〕に従順でなければならない。「私たちは、もろもろの霊の御父に対しては、なおさらに身を慎む」（『ヘブライ人への手紙』12章9節）。このことは、3つのことのためである。第一には、支配のためである。なぜなら、彼〔神〕は主だからである。「主が言われたすべてのことを、私たちは行ない、従う者であらねばならない」（『出エジプト記』24章7節）。第二には、範例があるためにである。というのは、『フィリピの信徒への手紙』第2章で言われているように、真の御子は御父に、死に至るまで従順となられたからである（8節）。第三には、ふさわしい報い〔お礼〕のためである。「私を選ぶ主の前で踊ろう」（『列王記 下』6章21節）。

**1032** 第四には、私たちは彼〔神〕に対し、叱責の際、忍耐強くあらねばならない。「わが子よ、主に叱られる時、主の試練を決して投げ出し、離れることのないように。主は愛する者を叱る。あたかも父が子に対する際に好むように *et quasi pater in filio complacet sibi*」（『箴言』3章11-12節）。

### 「私たちの」

**1033** ところで以上から、私たちが隣人に対して2つのことをしなければならないということが示される。第一に、〔私たちは隣人を〕愛さなくてはならない。〔隣人たちは〕私たちの兄弟だからである。すなわち、すべての人は神の子だからである。「その兄弟を見て、愛さないものは、見ていない神をどうして愛することができるか」。また、畏敬の念を払わなくてはならない。〔隣人たちは〕神の子だからである。「一なる父が私たちみなのものでないことがあろうか。神が私たちを創造したのではないことがあろうか。ならば、あなたがたの誰であれその兄弟を、どうして見下すのだろうか」（『マラキ書』2章10節）。「名誉に関して互いに勝りあっている者たち」（『ローマの教会への手紙』12章10節）。そして、これは実りのゆえでもある。彼〔神〕は自分に従うすべての者に対して永遠の救いの原因となったからである（『ヘブライ人への手紙』5章9節）。

## 「天におられる」

**1034** 他に祈る者に必要なもののうちでは、信頼が最も多く役立つ。「ところで信仰のうちでは、何ものも付け加わることを必要とされない」（『ヤコブの手紙』1章6節）。そこで主は私たちに祈ることを教えられる時〔私たちに、天国に先立って〕送ったものから、私たちのうちで信頼がそこから生じるもの。すなわち、父の好意から〔信頼は生じる〕。ゆえに「私たちの父よ」と言っているのだ。「もし、あなたたちが、悪の状態にありながら善い贈り物をあなたたちの子に与えることを知っているなら、あなたたちの〔天の〕父が天から善き霊を自分に願うものにするとは、どれほどなお確かであろうか」とあるように（『ルカによる福音』11章13節）。また、権能の偉大さから〔も信頼は生じる〕。そこで、「天におられる」と言うのである。それゆえに、「あなたに向かって私の目を上げた。天に住まわれるあなたに」とあるのだ（『詩編』122〔123〕編1節）。

**1035** そして、以上のことは、3つのことに関わり得る。

第一に、祈る者の準備に〔関わり得る〕。「祈りの前に、あなたの靈魂を準備させよ」（『集会の書』18章23節）。「天に」という言葉から分かるように、これは天の栄光である。「あなたたちの豊かな報いは天にある」とあるように（『マタイによる福音』5章12節）。

そして、この準備は、天を模倣することによる〔のでなければならない〕。子は父に似るのが必然だからである。それゆえに、「私たちは、地上のものの像を担ってきたように、天のものの像もまた担うべきだ」と言われるのである（『コリントの信徒への手紙 一』15章49節）。

また、〔この準備は〕天のものを観想することによらねばならない。人間たちは、父と愛するものがある場合、より頻繁に考えを整えるものである。「あなたの宝物庫があるところに、あなたの心もある」（『マタイによる福音』6章21節）とあるように。それゆえに使徒〔パウロ〕はこう言ったのだ。「私たちの回心 *conversatio* は天にある」（『フィリピの信徒への手紙』3章20節）。

また、〔この準備は〕天のものを目指す意図による〔のでなければならない〕。すなわち、天におられる方による〔意図によるのでなければならない〕。このようなことは、私たちが天のものを求めるのでなければならない。「あなたたちは、上にあるものを求めなさい。そこにキリストもいる」とあるように（『コロサイの信徒への手紙』3章1節）。

**1036** 第二には、「天におられる」と言われていることは、〔祈りを〕聞いている者の懇意さということに関わり得る。「天におられる」すなわち、そのうちに神が住まわれるがゆえに聖人たちのうちにおられるという言葉から分かるように、私たちにとって親類だからである。「あなたは私たちのうちにおられます、主よ」とあるように（『エレミア書』14章9節）。すなわち、聖人が諸々の天と言われている。「諸々の天は神の栄光を語る」とあるように（『詩編』18〔19〕編2節）。

ところで、神が聖人たちのうちに住むのは、信仰によってである。「キリストは、信仰によっ

てあなたたちの心に住まわれる」(『エフェソの信徒への手紙』3章17節)。「また、神が聖人たちのうちに住むのは」愛によってである。「愛のうちに留まる者は神のうちに留まり、神はその者のうちに留まる」(『ヨハネの手紙 一』4章16節)。「また、神が聖人たちのうちに住むのは」掟の成就によってである。「私を愛するものは、私の言葉を守るだろう。そして、私の御父はその者を愛するだろう。そして、その者のところに私たちは来るだろう。そして、[私たちは]その者のもとに留まるだろう」。

**1037** 第三に、「天におられる」と言われていることは、[祈りを]聞き届ける力のあること efficacia に関り得る。天〔という語〕によって物的な天を私たちが理解するのに応じて、神が物的な天に包み込まれるということはない。「天も、諸々の天の天も、あなたを捉えることはできない」とあるように(『列王記 下』8章27節)。神が考えるということで見通す力を持つということが意味されるのに応じて[祈りを聞き届ける力のあることに関わり得る]。すなわち、高いところから見ているがゆえに、「その聖なる高みから見通した」(『詩編』101〔102〕編20節)。そして、[神は]権能において崇高である。「主は天にその座を整えた」とあるように(『詩編』101〔102〕編19節)。そして[神は]永遠において動かない。「そしてあなたは永遠に変わらず留まられる」とあり、また「あなたの年も欠けることはないだろう」とあるように(『詩編』101〔102〕編13節, 20節)。それゆえに、キリストについてもこう言われる。「彼の王座は天の日々のよう」(『詩編』88〔89〕編30節)。哲学者は『天体論』第1巻でこう言っている。天は消滅し得ないがゆえに、すべての人は天を霊の場所としてきたのである。

**1038** それゆえに、「天におられる」と言われていることによって、祈るということの信頼が私たちに与えられるのだが、それは3つのことに関してである。すなわち、権能に関して、それに対して何かが願われる者の親しさに関して、願いの調和一致に関して。

a) それに対して何かが願われる者の権能は、天〔という語〕によって物的な天が理解されているなら、[そこに]浸透させられるものである。たとえ、彼[神]が物的な場所に捉えられることはあり得ないとしても、「天と地を私が満たしている」と書かれているからである(『エレミア書』23章24節)。しかしながら、物的な天には2つのものが浸透されるべきだと言われている。すなわち、その[天の]可能態における力と、自然本性における崇高さと。

**1039** 第一に、このように言う人たちに反対する。すなわち、すべては、天体の運命によって必然的に起きると言う人たちに。このような見解に従うなら、神に何かを願うということは役に立たないことになったであろう。しかし、天の神がそのようなものであると言うのはまさに馬鹿げたことだ。[神が]天の主であり、星の主である以上。「主は天にその座を整えた」とあるように(『詩編』102〔103〕編19節)。

**1040** しかし、第二には、次のように言う人たちに反対する。すなわち、祈る時、自分にとって何らかの物的な現象が神についてあるように考える人たちに。それゆえに、天にあると言われているのは、感性的な事物のうちで最高のものを通して神の、すべてを超える、また人間の欲望と知性をも超える崇高さが示されるからだということになる。それゆえに、思考され得、欲

望され得るものはすべて、神よりも小さいのである。このことゆえにこう言われている。「見よ、私たちの知識に勝る偉大なる神だ」(『ヨブ記』36章26節)。「すべての民を超えて高き主」(『詩編』112〔113〕編4節)。「あなたたちは、神を誰に等しいものとなしたのか」(『イザヤ書』11章18節)。

**1041** b) また神の親しさが示されている。天〔という語〕で聖人たちが受け取られているならだが。すなわち、その高さのゆえに、ある人々は、人間のことを気遣わないと言ったので、〔神は〕私たちにとって隣人であるがゆえに、それどころかもっとも親密であるということを考えなければならぬ。天にある、すなわち、天と言われている聖人たちのうちにあると言われているからである。「天は神の栄光を語る」、「あなたは私たちのうちにおられる、主よ」とあるように(『詩編』18〔19〕編2節、『哀歌』14章9節)。

**1042** 以上のことから、祈る者に信頼が生じるが、それは2つのことのゆえにである。

第一には、神に近接しているということのゆえに〔信頼が生じる〕。「主は彼を呼ぶ者たちすべての近くに在る」とあるように(『詩編』144〔145〕編18節)。それゆえに、「また、あなたは、部屋の中で」すなわち心の部屋の中で「祈ったなら」。

第二には、他の聖人たちの庇護によって、私たちは、願うものを獲得することができる。「聖人たちの内の誰かの下に向かえ」とあり、「お互いのために祈れ、あなたたちが救われるように」とあるように(『ヨブ記』5章1節、『ヤコブの手紙』5章16節)。

**1043** c) また、相応しく調和していることを、祈りは、天におられると言うことで得ている。天〔という語〕で永遠の霊的な善が理解される場合には、このこと〔永遠の霊的な善〕のうちに至福があるが、それは2つのことのゆえにである。

第一には、このことによって、我々の欲望が天のものに向けて燃え立たされる。すなわち、私たちに對して父がいるあのところへと、〔祈りが〕私たちの欲望を向けることに必ずなる。というのは、そこに私たちの遺産があるからである。「上にあるものを求めよ」(『コロサイの教会への手紙』3章1節)。「衰えることのない、天に蓄えられた遺産へと」。

第二に、このことによって、私たちは、天の命があり、天の父と同じ形をするようにされる。「天的な人が1人いるなら、天的な人々もまたいる」(『コリントの教会の手紙 一』15章48節)。そして、これら2つのことが、〔祈る者を〕祈るべきものに相応しくする。すなわち、天的な欲望、天的な命を作る。これらによって祈りは適切なものとなる。

## 願い1

### 御名が聖とされますように

**1044** これが第一の願いで、彼〔神〕の名が私たちの間で大いなるものとされ、言い広められるようにと願われている。

また神の名は第一に驚くべきものである。すべての被造物のうちで驚くべきことをなすからである。それゆえ、主はこう言われる。「彼らは、私の名において悪霊を追い出し、新しい言葉で語り、



蛇を取り去るだろう。たとえ死をもたらす何かを飲んだとしても、彼らを傷つけることはないだろう」(『マタイによる福音』28章17節)。

**1045** 第二に〔神の名は〕愛すべきものである。「その名において私たちが救われたものとなるのは、天の下に与えられた名に他ならない」(『使徒言行録』4章12節)。そして、救いはすべての人によって愛されるべきものである。至福なるイグナティウスの例だが、彼はキリストの名のみを愛していた。トラヤヌスが彼にキリストの名を否定するよう要求した時、彼の口から〔キリストの名は〕取り除くことはできないと答えた。そして〔トラヤヌスが〕首をはね、キリストを彼の口から取り除くと脅した時、こう言った。「たとえあなたが〔私の〕口から〔キリストの名を〕取り除いたとしても、決して心からは取り去れないでしょう。なぜなら、この名を私は、私の心に書き込んで、持っているからです。だから、彼〔キリスト〕に呼びかけるのを止めることはできないのです」。これを聞いてトラヤヌスは、それが証されることを欲し、この神の僕の首をはね、彼〔イグナティウス〕の心臓を取り出すよう命じた。すると、見つかったのは、キリストの名が金文字でそれに書き込まれているということであった。すなわち、彼〔イグナティウス〕の心の上に、彼の名を印として〔神が〕置いていたのである。

**1046** 第三に、〔神の名は〕畏敬すべきものである。使徒〔パウロ〕は言っている。「イエスの名においてすべてのひざはかがめられますように。天の者たちのひざも、地の者たちのひざも、地獄の者たちのひざも」。天の者たちの、とはすなわち、天使たち、および至福者たち、ということであり、地の者たちの、とはすなわち、清められた者たちということであり、彼らは栄光を得ようとの愛、あるいは罰を避けようとの恐れゆえにそうするのであり、地獄の者たちのつまり呪われた者たちも、彼らは恐れゆえにそうするのであるが。

**1047** 第四に、〔神の名は〕言い尽くせないものでなければならない。それを語るにはどんな言葉も不足だからである。ゆえに、時には、被造物によって語られる。それゆえに、堅さという意味で岩と言われる。「この岩の上に私の教会を建てる」。また、清めの意味で火と〔言われる〕。火が金属を精錬するように、神もまた罪人の心を清めるからである。だから「神はあなたの焼き尽くす火である」〔と言われる〕のだ(『申命記』4章24節)。また、照らしの意味で光と〔言われる〕。光は闇を照らすように、神の名もまた心の闇を照らすからである。「私の神よ、私の闇を照らしたまえ」(『詩編』17〔18〕章29節)。

**1048** そこで、私たちは、その名が明らかにされることを願う。それが聖だと知られ、心に留められるように。

そして、聖とは、三重の意味で言われている。

すなわち、聖とは、堅いということと同じである。それゆえに、天にあるすべての至福者は聖と言われる。永遠に幸福であるよう固定され、堅められているからである。世には、聖なる者はあり得ない。〔世では人は〕連続的に変わり得る者だからである。アウグスティヌスによれば、「主よ、私はあなたから離れて、大いに過ちを犯してきた。あなたの不動さから離れて迷うことになった」。

**1049** 第二に、聖とは、地のものでないということと同じである。ゆえに、天にある聖なる者

たちは、決して地に属する情感を持たない。そこで、使徒〔は言っている〕。「私はすべてのことについて、キリストに利益をもたらすための肥やしになるようにと思い決断してきた」（『フィリピの信徒への手紙』3章8節）。

また、地〔という語〕によっては罪人たちが意味されている。第一には、芽生えの意味で〔罪人を意味している〕。すなわち、地は耕されなければ、とげのある草やひしを芽生えさせる。そのように、罪人の靈魂も、恵みによって耕されなければ、〔靈魂が〕芽生えさせるのはひしと罪による痛みだけである。「とげのある草とひしとをお前のために芽生えさせるだろう」（『創世記』3章18節）。

第二には、暗さという点で〔地という語は罪人を表している〕。すなわち、地は暗く陰になっている。かくて、罪人もまた暗く陰になっているのである。「闇が深淵の面にあった」（『創世記』1章2節）。

第三に、配合上の観点で〔地という語は罪人を表している〕。すなわち、地は水の湿り気によって結合されていないと、バラバラになってしまう元素である。〔そこで〕すなわち、神は地を水の上においたのである。「彼は地を水の上で固めた」とあるように（『詩編』135〔136〕編6節）。というのは、水が湿っていることで、地は乾いた状態を保たれるからである。そのように罪人も、靈魂を乾いた状態で有している。「私の靈魂はあなたにとって、水のない地のようだ」とあるように（『詩編』142〔143〕編6節）。

**1050** また第三に、聖と言われるのは、すなわち、血で染まっていると言われることである。それゆえ、天にある聖なる者たちが聖と言われるのは、彼らが血に染まっているからである。「彼らは、大いなる苦難のところから来た。そして、彼らの衣服を子羊の血で洗った」とあるように（『ヨハネの黙示』7章14節）。また同じく、「彼は私たちを私たちの罪から、彼の血で洗い清めた」とある（『ヨハネの黙示』1章5節）。